

災害復興における「立て直し」志向と「世直し」志向 Recovery-oriented vs. Social Reform-oriented Thinking in Disaster Revitalization

矢守克也¹
Katsuya YAMORI

Based on cultural psychiatrists' argument, we distinguished two different social orientations toward disaster rehabilitation: recovery-oriented vs. social reform-oriented thinking. The former, which is more conservative way of thinking, aims at getting restored to former state after the disaster by preserving the continuity of social conditions in the past. The latter, which is more revolutionary way of thinking, aims at bringing a fundamental social reform in the future by regarding the disaster damage as a spring board to renew a society. It is discussed that the two orientations have both positive and negative aspects, so that a good balance between the two extremes is important to realize successful disaster revitalization.

キーワード 災害復興, 立て直し, 世直し, 時間論, アンテ・フェストウム, ポスト・フェストウム
Key Words: disaster rehabilitation, recovery-orientated thinking, social reform-oriented thinking, time theory ante-festum, post-festum

1. 災害復興における「立て直し」と「世直し」

災害復興における「立て直し」と「世直し」という対照を最初に提起したのは、精神医学者の中井久夫である。中井(1982)¹⁾は、江戸時代において、災害や飢饉に遭遇した後の社会に、「立て直し」路線と「世直し」路線という2つの対照的な社会的反応が存在していたことを、独自の精神医学論—特に、統合失調症患者と鬱病患者に見られる〈時間〉感覚—にもとづいて提案した。両者が、今日言うところの災害復興論(たとえば、関西学院大学COE災害復興制度研究会(2005)²⁾、浦野・大矢根・吉川(2007)³⁾)とオーバーラップすることはもちろんである。

さらに、「立て直し」と「世直し」が、中井(1982)と軌を一にしながらも、それをさらに明確化させた木村(1982)⁴⁾の〈時間〉論とリンクしていることは、災害復興に向けた社会の姿勢を抜本的に問い直す意味でよりいっそう重要である。具体的には、「立て直し」志向と〈時間〉論に言う〈ポスト・フェストウム〉が、「世直し」志向と〈時間〉論に言う〈アンテ・フェストウム〉とが対応する。以下、木村(1982)⁴⁾の〈時間〉論と防災との関連性がより明確と思われる事前期に焦点をあて、特に「計画」(防災計画)というコンセプトと関連づけて簡単に説明する(2節)。次に、災害復興と直接的に関連する事後期について、「世直し」志向(3節)、「立て直し」(4節)の順で〈時間〉論に基づく考察を行う。その後、四川大地震(2008年)後の復興プロセスに見られる「早さと格差」について、2つの志向性の観点から意味づける。

2. 計画の〈時間〉性

「計画」することは、未来の出来事を予見し、それに先立って対策を練り事前対応をなすことだから、通常、

未来指向的な営みだと思われる。しかし、木村(1982)⁴⁾の〈時間〉論を踏まれば、ことはそう単純ではない。「計画」を支えているのは、統合失調症患者に典型的な〈アンテ・フェストウム〉(祭りの前; 未来先取的)な〈時間〉意識ではなく、むしろ、鬱病患者に典型的な〈ポスト・フェストウム〉(祭りの後; 過去拘泥的)な〈時間〉意識、である。〈アンテ・フェストウム〉における未来が、とんでもないことが起こるかも…という祭りの前の高揚感と不安の併存にも似た「圧倒的に未知なるものとしての未来」であるのに対して、〈ポスト・フェストウム〉における未来がすべて、予定済の将来(現在のつつがない延長)という形をとろうとする点が重要である。だからこそ、〈ポスト・フェストウム〉的な意識では、事が起きてから悔やんでも「あとのまつり」だと考え、事前準備に執着する。よって、「そんな事態[大災害; 引用者]にならないように用心してかかる意識も、一見将来に備えての先走った姿勢[〈アンテ・フェストウム〉; 引用者]に見えるが、実は『あとのまつり』になることを予想しての保守的でポスト・フェストウムの意識」(木村, 1982, p.108)⁴⁾である。

日本を含む先進諸国の防災の中核、たとえば、地震を予知しようとする事、防災計画を立案すること—こういった社会的活動はすべて、〈ポスト・フェストウム〉的な〈時間〉性の発露だと言ってよい。なぜなら、それらは、ちょうど鬱病患者と似て、未来を真正の未知としてではなく予定済の将来という形で確保しようとする働きだからである。それは、まだ来ぬ未来の災害について、それをもう体験したこと(過去)のように扱おうとしているのである。

〈ポスト・フェストウム〉は、現代の防災研究・実践(現代社会一般)を支える主軸的態度であり、通常有効

¹ 京都大学 防災研究所

Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

に作用する。しかし、何らかの事情により「つつがない延長」が保証されないかに事態があらわれたとき、状況は一変する（鬱病者が発病するのも、この時点である）。たとえば、迎え撃つべき災害の規模が、すでに完了した対策や今後可能と思われる災害準備に比べて著しく大きいと自覚された場合である。このとき、多くの人びとが既往の「計画」とその中での役割分担に基づいて「几帳面に」積み重ねてきた災害準備が総体として、「とりかえしがつかないほど遅れている」（鬱病患者に典型的な言葉の一つ）と感覚される可能性が生じる。

この視点に立てば、たとえば、防災意識の欠如とは、字義通り、防災に対して「関心（意識）がないこと」ではないことがわかる。それは、むしろ、〈ポスト・フェストゥム〉にとらわれた人びとが陥る鬱病（将来の災害のためになすべき課題があまりに多いために、現状を「とりかえしがつかない」と思うこと）である。

ここから、次のような実践的な洞察も得られる。ちょうど、鬱病患者に「頑張れ、立ち向かえ」と鼓舞し、「遅れ」の回復を促すことが通常マイナスの効果しか生まれないのと同様、防災意識が欠如・低下していると思われる人びとに、「まだまだ準備が足りないですよ」と指摘することは無意味である（人びとは、それをいやというほど自覚しているからこそ鬱病（無関心）になっているのだから）。まして、「その課題が終わっても、まだ別のことが必要だ」などと次々と新たな要求を持ち出すことは、多くの場合、否定的な結果しか生まれない。

では、どのようなアプローチがあるのか。「脅しの防災はやめよう」（小山、2002⁵）、「防災と言わない防災」（渡邊、2002⁶）、「クロスロード」（矢守・吉川・網代、2005⁷；吉川・矢守・杉浦、2009⁸；Yamori、2007⁹）など、その萌芽はすでに芽生え始めている。これらはいずれも、その理論的核心に、防災計画が随伴しがちな過剰な〈ポスト・フェストゥム〉性を、〈アンテ・フェストゥム〉性によって中和することを伴った実践と位置づける。

3. 世直し志向 — 〈アンテ・フェストゥム〉 —

(1) 未知なる未来への期待と怖れ

災害を契機とした「世直し」志向は、「事後」における〈アンテ・フェストゥム〉的な感覚を典型的に表現している。すなわち、災害の発生を、過去から現在へと至るスムーズな社会の移行を断絶させたものととらえ、それを根拠として、〈アンテ・フェストゥム〉に特有の「未知なる未来」への感覚をいっそう研ぎ澄ませて、抜本的な「新規まき直し」、すなわち、「世直し」へと邁進するという社会的反応である。「世直し」路線の特徴は、それと対比される「立て直し」路線が、「手近なもの、具体的なものから出発」（中井、1982、p. 61）¹¹し、「近い過去への範例（パラダイム）指向性」（同 p. 62）を有しているのとは対照的に、「もっともかすかな兆候、もっとも実現性の遠い可能性を、もっとも身近に、強烈な現前感をもって感じ」（同 p. 62）る点にある。

このような志向性が、極端な形で、特に、現代の自然科学的知識とはほとんど無関係な場所で発現したのが、たとえば、江戸時代における地震鯨絵が描く世界である。巨大地震の「事後」にしばしば登場した地震鯨絵において、地震の神たる鯨は、災害の原因であるという意味でむろん厄神であるが、それと同時に、住みがい世の中、つまり、退廃・墮落・腐敗に満ちた現世を抜本的に変革

し、それを好転させるための福神でもある（北原、2000）¹⁰。そこには、過ぎ去った災害が「世直し」の第一歩であり、その後を生じた吉兆、たとえば、御上からの救済措置（御救小屋や御救米）や一時的な好景気を、根本的な「世直し」、すなわち、まったく新しい社会の到来を告げるかすかな兆候だと見るカタストロフ変革論が表現されている。

そして、このような論理は、何も前近代的な社会にのみ特有のものではない。現代においても、たとえば、オウム真理教による阪神・淡路大震災の意味づけ（大澤、1996）¹¹の中に、同様の思考 — 大災害を、究極の「終末」、あるいは、「終末」という名の一発逆転的な変革へ向けた一歩であると位置づけること — を見ることができる。

(2) 大規模な都市改造計画の光と陰

「事後」における〈アンテ・フェストゥム〉と「世直し」との関連性が、より現代的な装いをまとったものとして、大規模なハードウェアの改造を伴う都市の災害復興計画をめぐる動きを挙げることができる。越澤（2005）¹²が一貫して主張してきた論点が、その代表例であると思われる。大規模なハードウェア改造と聞くと、行政主導の無理な区画整理事業の強行といったイメージが想起されがちであるが、越澤の所論は、まさにこうしたイメージがもたらす不幸やその遠因に向けられたものである。

越澤（2005）¹²は、同書の中で、主として次の2つのことについて論じている。第1は、関東大震災後の東京など、全国の主要都市の街並みの多くが、災害や戦争からの復興事業の賜物だという点である。第2は、こうした実績にもかかわらず、大規模なハードウェア改造を伴う復興事業に対する一般的評価が低いという点である。上述の復興事業の成果の多くは、一般の人びとはおろか、まちづくりの専門家にも十分認識されていない。

筆者が、ここで提起したい論点は、「未完」と「忘却」という2つのキーワードで表現できる。まず、「未完」とは、災害復興事業において、過去の計画（復興計画や都市計画）において「未完」に終わった事業に再び光が当てられることが多いという点である。たとえば、阪神・淡路大震災の発生直後（1995年2月3日）に掲載された全国紙の記事の中で、越澤氏自身、次のように語っている。「神戸は1938年に大水害にあい、復興計画がたてられたが実現せず、ようやく戦後復興事業で東西を走る山手・中央・浜手（国道43号）の三大幹線が誕生した。しかし、防火のための川沿いの幅70メートルの带状緑地や、南北に走る幅100メートルの緑樹街路計画は未完に終わった」（越澤、2005、p. 232）。

阪神・淡路大震災の被災地においては、他にも、阪神高速道路の廃止や地下化、新幹線の別ルート建設など、相当程度ラディカルな復興プランが話題に上ったことは事実である（神戸新聞社、1995）¹³。たとえば、越澤（2005）¹²は以下のように指摘している。大震災で倒壊しその後復旧された阪神高速道路の高架橋と並行して走る国道43号線の構想は実に戦前にさかのぼり、1938年（昭和13年）の阪神大水害の復興計画の際、「浜手幹線」として構想された。当初の構想では、全幅50メートルの中に車道はわずか18メートル（4車線）、あとは並木、植樹帯から成る計画であったが、その後車道は10車線に拡大され、わずかに残った中央分離帯に阪神高速道路の高架橋が建設された。彼は、関係者が残した記録集から次の箇所を引用する。「将来の高架が予想さ

れていたとはいえ、中央分離帯の緑と色とりどりの花の美しさを失い、また、六甲の美しい眺めを視界から失ったのは、いかにも残念な思いがする」（越澤，2005，p. 201）¹²⁾。

以上に見てきた経緯に、過去が動かしがたい完了性を帯びることなく、むしろ、「〈いま〉から」変更可能な未定の相であられるという〈アンテ・フェストゥム〉的性質を感じとることは、さして難しくない。こうした計画の多くは、一特に、その後の社会情勢の変化の大きさに照らしたときには一一般の目には、旧い昔のように放擲され、相当程度非現実的なものと映る。しかし、〈アンテ・フェストゥム〉的な態度においては、それは、単に日の目をみないままに、つまり「未完」のままに放置されていただけであって、完全に消失したものと確定してはいたわけではない。巨大災害の発生というアクシデントによって、社会全体に、未来とは「これまでのつつがない延長に非ず」という雰囲気醸成されたとき、かつての夢は、長い眠りから醒めて再活性化されるのである。

もう一つのキーワードは、「忘却」であった。大がかりな災害復興計画が「未完」に終わる原因の一つとして、越澤（2005）¹²⁾が指摘するのが、復興事業の成果が「忘却」されているという点である。諸事例を参照するまでもなく、区画整理事業などが暗礁に乗り上げるとき、ほぼ例外なく、行政と地域住民とのコミュニケーション不足、利害対立といった要因がその原因として指摘される。こうした認識そのものに誤りはないと思われるが、それとともに、越澤氏が指摘するのが、「これまでの災害復興まちづくりの実績と成果に対する社会的な認識が日本全体としてはきわめて不十分」（越澤，2005，p. 242）¹²⁾だという事実である。「災害と復興の記憶は意外と忘れ去られやすい」（同 p. ii）のである。この点について、中井（1982，p. 62-63）¹⁾は、「わが国の『世直し』路線は、『立て直し』路線にくらべて、よりひ弱であり、より幻想的である。伝統的にも『世直し』路線は、二宮〔二宮尊徳：引用者〕のような骨太なイデオログにして実践者をもたなかった。…（中略）…これに対して『立て直し』路線は、『世直し』路線の人をたえず『立て直し』路線にくり込み、ついにくり込みえない者を極端な破滅的幻想のなかに追いやるだけの強力性をもっている」と指摘している。

(3) 「価値観の軸ずらし」

他方、〈アンテ・フェストゥム〉性がマイルドな形で発揮されれば、特に、反対の〈ポスト・フェストゥム〉がもたらすマイナス面を中和する形で発揮されれば、より生産的な成果をあげることも指摘しておきたい。たとえば、中越地震（2004年）以後、渥美（2007）¹⁴⁾が指摘する通り、「救援は神戸、復興は中越」という合い言葉のもと、ボランティアの「否定性」が被災地域の中長期的復興や被災住民の中長期的エンパワーメントにも向けられてきたことは、重要な意味をもっている。4節で述べるように、〈ポスト・フェストゥム〉、言いかえれば、「立て直し」路線に濃厚に支配される傾向にある従前の災害復興においては、被災地域を旧状へと復旧させることが目指されることが多い。さらに、この場合、当該時点における主要な価値観に照らして望ましいと判断される状態へ向けての復旧（たとえば、地域人口は被災前レベルに回復し、理想的には増えた方がよい）が重視される。かつ、そうした目標状態へ向けた標準的なタイムスケジュールが設定されることも多い（たとえば、災害後

3年も経って、災害前の80%の人口では、復興が「おこなわれている」とされる）。

これに対して、渥美（2007）¹⁴⁾が、「復興デザイン研究会」などを中心に描く、被災者、災害NPO団体、行政が連携した復興像は、〈ポスト・フェストゥム〉的な動かしがたい既定路線に即した形での災害復興に対する、〈アンテ・フェストゥム〉的なアンチテーゼと位置づけうる。つまり、そこでは、棚田、山菜、星、蛍など「地区の宝物」や、集落外の住民との交流施設「やまびこ」を中核とした地域づくり（長岡市法末地区）や、愛知県地区との農業交流を中心とした災害復興の試み（川口町田山地区）など、被災者が暮らす個々の集落の個別的事情が、主として、災害NPOの小まわりの利いた機動力によってクローズアップされている。

この結果、災害復興にまつわるスタンダードな「役割同一性」（「被災者役割」）や標準的なタイムスケジュールに対する「おくれ」を問題視することが、注意深く回避されている。渥美（2008）¹⁵⁾が注目する「あせらないで下さい」というフレーズは、こうした感覚を象徴している。「どうしても不安から、少しでも早く自分の進路を決めたくります。でもあせらないで下さい。急いだ人の中には、後悔した人達がいたからです」（中越地震の被災地（小千谷市塩谷地区）の被災者から、中越沖地震の被災地刈羽村の被災者へと送られた手紙の一節）。

この点で、「中越復興支援会議」の中心人物である稲垣文彦氏が言う「価値観の軸ずらし」（宮本，2007）¹⁶⁾という視点は興味深い。なぜなら、「軸をずらすということは、過去の誤りを否定する必要がある」（室崎，2007）¹⁷⁾ということであり、これは、〈ポスト・フェストゥム〉的な保守傾向を脱し、これまで災害復興を主導してきた既存の価値を相対化する点にこそ、復興の新しい形を見いだそうとする姿勢を示しているからである。過疎地域、高齢化した集落、農業の衰退—彼らが復興にとり組む集落の多くは、目下の時点で支配的な価値観を前提にする限り、被災という事実がなかったと仮定しても、まちづくりが困難だと通常思いたくなるような地域にある。しかし、だからこそ、被災というネガティブ一色と思われる出来事を、ポジティブな意味で〈アンテ・フェストゥム〉に活用しようとするドライブが生じるのである。

4. 立て直し志向—〈ポスト・フェストゥム〉—

(1) つつがない延長

中井（1982）¹⁾によれば、手近なもの、具体的なものから出発する、というのが「立て直し」路線の根本原理である。被災によっていったんは大いなる断絶を余儀なくされたかに見える現況に対して、二宮尊徳的な「勤勉と工夫の倫理」でもって働きかけ、それを、再び、過去からの「つつがない延長」として再定位させようとするタイプの災害対応論、そして復興論である。この際、緊急期においては防災対応マニュアルや地域防災計画などが、復旧・復興期においては「被災者再建支援法」や各種の復興計画などが、何が従前からの「つつがない延長」だと見なしうるのかを具体的に指定する拠りどころとして活用されることになる。

阪神・淡路大震災後、被災した各自治体がとり組んだ復興事業の多くも、概ね〈ポスト・フェストゥム〉に立脚した「立て直し」路線に立脚して展開された。何をいつまでに成し遂げるかという計画の立案とその実行、そして、事業の進捗状況と成果の検証、所期の目的が達成

されず必要と認められた場合に追加実行された各種のフォローアップ事業—こうした一連の事業が、「周年事業」や「周年行事」という名の共同体時計の上に時を刻みながら実行されていった。もちろん、個々のとり組みの成否は、それぞれの具体相に即してさまざまな評価を受けているし、またそうあるべきである。しかし、他方で、それらのとり組みの具体的内容がいかにか多様に見えても、その根底に、「元に戻った」、「まだ目標に達しない」といった反応を惹起するような志向性、すなわち、〈ポスト・フェストゥム〉的な態度が共有されていることにも注意する必要がある。

(2) 災害文化の効用と限界

「事後」における〈ポスト・フェストゥム〉性によって特徴づけられる「立て直し」志向を、「災害文化」(矢守, 2007)¹⁸⁾と関連づけて理解することも有意義だと思われる。すなわち、輪中文化に代表される災害文化の要諦とは、災害の支配あるいは災害との対決と言うよりも、災害の受容あるいは災害との共存という側面を強くもっている。言いかえれば、災害を完全に抑え込もうとするのではなく、「危険性もあるが、『立て直し』も容易だ」という社会的状態を実現させ、その状態を長期にわたって維持していくための智慧と仕組みの集積が災害文化だと言える。災害との受容・共存という態度が、災害を、その都度新奇で未知の現象としてとらえる〈アンテ・フェストゥム〉ではなく、それを、「これまでのつづがない延長」線上で理解しようとする〈ポスト・フェストゥム〉とより親和的であることは明らかである。

ただし、ここで注記しておかねばならないことは、こういった路線は、次の条件下ではじめて有効に機能する点である。それは、災害の原因となる自然現象が、「同様のことの繰り返し」と認識される程度の頻度と安定度をもって反復されること、である。梅雨時、台風時など、毎年、ほぼ一定の時期に、ほぼ同程度の規模で繰り返される洪水(矢守(2005)¹⁹⁾の言う〈1年の災害〉)と共存し、同じ「立て直し」を反復する中で醸成されてきた輪中文化は、この点で、まさに「災害文化」の典型だと言える。

しかし、たとえば、海溝型の地震とそれに伴う津波災害など、〈100年の災害〉においては、その発生周期がかなり間延びし、また各回異なった現れを見せるために、一般には、「災害文化」の醸成はかなり困難になる。まして、いどこで起こるかほとんど予測不能な内陸活断層型の地震や、「ゲリラ的」と称されるような集中豪雨を相手にした「災害文化」を誕生させることは非常に難しい。それは、その都度の災害が、過去からの既定路線上ではなく、まったく新しいものの到来として、つまり、〈アンテ・フェストゥム〉的にあらわれるからである。

(3) 「とりかえしがつかない」という感覚

さて、事後期における〈ポスト・フェストゥム〉も、「立て直し」路線として確固たる地位を築いており、もはや、それなしで復旧・復興を論じることは、ほとんど不可能と思えるほどである。しかし、こうした「立て直し」路線も、固有の弱点をもっている。それには、小規模な修正と手直しによって対応可能な小さな弱点と、ちょうど精神病理学に言う鬱病の発症に対応した、見逃しがたい社会的機能不全を結果する大きな弱点とがある。

前者についてはすでに論じた。すなわち、「立て直し」路線においては、文字通り、旧状への復旧が目指されることが多い。さらに、この場合、当該時点における主要な価値観に照らして望ましいと判断される状態へ向

けての復旧が重視され、かつ、そうした目標状態へ向けた標準的なタイムスケジュールが想定されることも多い。これは、「よき被災者役割」や「復興支援担当者役割」など、「役割同一性」の固定化が生じはじめているということである。こうした症状に対しては、〈アンテ・フェストゥム〉的な要素を中和的に導入することによって手直しや補完をすることが、ある程度可能である。しかし、症状がいつそう深刻化し、諸般の事情から、「役割同一性」のつづがない遂行が困難になった場合、一気に、もはや「とりかえしがつかない」という鬱的リアクションが、〈社会〉のレベルで生じることになる。これが、より大きな弱点と称したものである。

事後において、〈ポスト・フェストゥム〉が尖鋭化し、それが大きな社会的機能不全となって表面化することは、特に珍しいことではない。まず、災害の痛手があまりに深く、そのために、もとの生活へと復帰することを絶望視し、身体的、精神的に立ち直ることに大きな困難を抱える被災者が、無視できないスケールで発生する。それまでの平穏無事な日常生活を突如破壊された被災者の多くが、「とりかえしがつかない」という感情を抱くことはごく自然であるし、それが、極度の倦怠感や無力感、独特の自己喪失感、さらには、鬱病、PTSD(心的外傷後ストレス障害)、離人症など、心身の不調につながることも多い。ただし、これらは、基本的には、基本的には個人の水準(〈自己〉)に関わる事例でもあり、多くの既刊関連文献が存在するので、詳しくはそれらを参照されたい(たとえば、中井(1996)²⁰⁾など)。

事後期の〈ポスト・フェストゥム〉の否定的な側面が〈社会〉の水準で表面化すると、災害をきっかけとして(地域)社会全体に衰退感や閉塞感が蔓延し、それが翻って実際に社会活動の停滞を加速化させることになる。カナダのハリファックスで起きた大爆発事故が同市に与えた影響を事例に、災害社会学者のプリンスが、その古典的な研究で指摘しているように、大災害は社会的な変化を加速させる。すなわち、仮に、被災した(地域)社会が、政治的な混乱傾向、あるいは経済的な下り坂傾向にあったとすれば、大災害は、それらをいつそう加速させるし、その逆も真なりというのである。実際、旧くは、江戸期の大災害と政治・経済状況との間に同種の関連性があることは多くの論者が指摘している(たとえば、北原(2006)²¹⁾など)。近年では、景気後退局面で阪神・淡路大震災に見舞われた神戸市や兵庫県における、その後の景気状況が、他都市、他地域と比べてもいつそう芳しくないことは明らかである(たとえば、兵庫県復興10年委員会(2005)²²⁾など)。

この傾向は、先進諸国よりも、むしろ、開発途上国—正確には、先進国の論理(〈ポスト・フェストゥム〉中心の論理)が中途半端に導入された開発途上国—において著しい。すなわち、渡辺(2003)²³⁾や中須(2006)²⁴⁾は、「死の順番待ち行列」、「社会格差と人的被害」といった説得的かつ印象的なキーワードとともに、史上最大規模の被害を数えたインド洋大津波(2004年)の被災地を含め、多くの開発途上国における災害被害が、単発の自然現象による被害発生という側面よりも、むしろ、貧困、戦乱、政治的汚職、所得格差、伝染病といった社会・経済的な問題や混乱と自然災害によるダメージとの間に見られる負の循環構造による被害増幅という側面に、より多く起因していることを指摘している。

(4) 「事前復興」とは何か

本節の最後に、近年注目を集めている「事前復興」が、

「立て直し」志向と強力に結びついていることを指摘しておこう。「事前復興」は、〈ポスト・フェストゥム〉の射程—未来のどこまでを既定化（過去化）しようとするのか—が、これまでのように、災害の渦中や直後に限定されるのではなく、事後、それもかなり遠い将来にも拡大していることを示している。「事前復興」とは、たとえば、経済的困難を抱えている人びとが居住している老朽住宅や賃貸住宅の耐震改修や不燃改修の事業を、潜在的な被災者に対する事後の公的支援として前倒しする形で行うことなどを意味する（詳しくは、饗庭・市古・吉川・中林・村上・高見沢（2004）²⁵）、吉川（2007）²⁶など）。こうした努力がもつ実践的な効能、あるいは、革新的な意義については十二分に了解されるべきである。

しかし他方で、まだ起こりもしない災害を起こったこととし、さらに、何が起こるかも正確には把握できないうちに、そこからの復興路線について議論し、それを事前に固めておくという姿勢そのものは、〈時間〉のありようから見たときには、相当程度、〈ポスト・フェストゥム〉性に偏した場所に位置づけられることには十分注意を払っておくべきであろう。しかも、それにもかかわらず、私たちが、こうした実践をごく普通のこととしてなそうとしているという事実は、現在の日本社会に生きる私たちの常識が、相当程度、〈ポスト・フェストゥム〉的であることを雄弁に物語っている。

5. 四川大地震から何を学ぶか

2008年5月12日、中国の四川省を中心とする地域で「四川大地震」が発生した。本地震については、筆者自身が関与した調査報告（たとえば、矢守・渥美・鈴木・近藤・淳于，2008²⁷）；渥美・矢守・鈴木・近藤・淳于，2008²⁸）；渥美・矢守・鈴木・近藤，2009²⁹）；矢守・渥美・鈴木・近藤，2009³⁰）を含め、多数の報告があるので、ここではその概要には一切触れず、本稿の内容に関わることを1点だけ強調しておこう。



図1 未来都市を思わせる復興計画（「新家園：成都市災後重建規劃成果展」にて筆者が撮影，2008年10月）

それは、四川地震後の災害復興に見る「早さと格差」をどう見るか、という論点である（矢守他（2009）³⁰）を参照）。筆者は、「早さと格差」の意味を正確に理解するためには、少なくとも日本社会よりもはるかに強力だと思われる中国社会における〈アンテ・フェストゥム〉性、すなわち、世直し志向について十分理解するこ

とが、不可欠だと思われる。

たとえば、四川大地震からわずか5ヶ月後に成都市内で開催されていた「新家園：成都市災後重建規劃成果展」（災害復興計画に関する展覧会、図1を参照）について、筆者（矢守他（2009）³⁰）は、「1970年に大阪で開催された万国博覧会を想起した」と書いた。その真意は、一見、被災地の現状（多くの遺族がいまだ深い悲しみの中にあるだろうこと、そして、多くの被災者が当面の生活にも苦勞していること）に対する配慮や関心を欠いた、荒唐無稽な夢物語にすら見える復興計画も、〈アンテ・フェストゥム〉の時間性を前提にすれば、災害復興における「世直し志向」のあらわれとして十分了解可能だということである。そればかりではない。四川大地震へと至る中国社会の直近10年と、高度経済成長を遂げた1960年代の日本社会（言いかえれば、上述の「万国博覧会」へと至る10年間）とを比較校合すれば、夢物語がけっして夢物語ではないこと、すなわち、被災者に現実的な希望を与える可能性もありうることもわかる。

1960年代、日本のGDP（国内総生産）は、約40兆円から約110兆円へと倍増した。池田勇人首相の「所得倍増計画」という夢物語が現実化したわけである。他方で、中国では、1998年に約140兆円であったGDPが、2007年には約350兆円に急増した。加えて、2002年の第16回党大会では「四倍增計画」（2020年までに一人あたりのGDPを2000年の4倍にする）も掲げられ、実際にその目標へ向けて、中国社会はほぼ順調と評価しうる着実なステップを踏んで経済発展を遂げていた。2008年の四川大地震は、このようなときに、すなわち、1978年の「改革・開放」からちょうど30年の節目の年に、中国国民の多くが30年前の夢物語が単なる夢物語ではなかったことを実感しうる社会状況下で起こったのである。日本で言えば、高度経済成長のまっただ中で起こったのが四川大地震なのである。

一見不見識ではないかと感じてしまう程度にまで極端に未来志向でバラ色の展示会が、災害から半年も経たない時点で、数百万人もの被災者が仮設住宅などでの不自由な生活を余儀なくされる中で無理なく成立する理由は、本稿の立場（より一般には、矢守（2009）³¹）で展開した「防災人間科学」の立場）から見れば、以上の点にあると分析できる。すなわち、中国社会の「早さと格差」を、〈ポスト・フェストゥム〉性の〈時間〉感覚が支配的な日本社会における防災実践の見地から批判したり、逆に、日本社会では実現困難な防災政策の延命（輸出）先として中国社会を指定したりすることは、いずれも、皮相的なレスポンスと言わざるを得ない。災害復興学にとって重要なことは、そうした一次的な反応を示すことではない。そのような一次的な反応が起きる理由やメカニズムをより深層から解明して、真に学ぶべきものを探り、真に伝えるべきことを伝えることである。

6. まとめ

これまでの行論から明らかと思われるが、筆者は、立て直し志向（〈ポスト・フェストゥム〉）と世直し志向（〈アンテ・フェストゥム〉）のいずれか一方に軍配を上げたいわけではない。両者は、それぞれ長所・短所もっている。あらためて、短所について例示するなら、いったんボツになったはずの大規模な社会基盤整備事業が、災害を期に社会の大方の意向に反して再浮上するような事例は、「世直し」志向の悪しき側面であろう。逆

に、たとえば、「被災者役割の固定化」といった用語に象徴されるように、事前の復興イメージに固着したり、事後の社会変化に適応することなく当初措定した復興計画の遂行に拘泥したりするといった事例は、「立て直し」志向のダークサイドであろう。よって、肝心なことは、いずれかに肩入れすることではなく、両者のバランス、舵取りである。

最後に、本稿の要点をまとめておこう。①災害復興（実は、事前の防災・減災対策もそうであるが）に対する社会の姿勢には、2つの対照的な志向性—「立て直し志向」と「世直し志向」—があること、②両者は、それぞれ長所と短所を併せもつこと、③いずれか一方が突出したときには否定的結末を生む可能性が高いこと、④具体的な復興施策々々だけではなく、時代や文化を横断するような鳥瞰的な見地から復興プロセスを検証する必要があること、⑤その上で、両者の均衡を回復するような方向性を打ち出す必要があること、以上である。

参考文献

- 1) 中井久夫：分裂病と人類 東京大学出版会, 1982.
- 2) 関西学院大学 COE 災害復興制度研究会：災害復興—阪神・淡路大震災から10年— 関西学院大学出版会, 2005.
- 3) 浦野正樹・大矢根淳・吉川忠寛：復興コミュニティ論入門（シリーズ災害と社会2） 弘文堂, 2007.
- 4) 木村敏：時間と自己 中公新書, 1982.
- 5) 小山真人：「脅しの防災」はやめよう—自然災害と恵みは不可分— 静岡新聞：時評（2002年9月19日付）, 2002. [http://sk01.ed.shizuoka.ac.jp/koyama/public_html/etc/opinion/jihyo1.html]
- 6) 渡邊としえ：地域社会における5年目の試み—「地域防災とは言わない地域防災」の実践とその集団力学的考察— 実験社会心理学研究, 39, 188-196, 2002.
- 7) 矢守克也・吉川肇子・網代剛：防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション—「クロスロード」への招待— ナカニシヤ出版, 2005.
- 8) 吉川肇子・矢守克也・杉浦淳吉：クロスロード・ネクスト—続：ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション— ナカニシヤ出版, 2009.
- 9) Yamori, K.: Disaster risk sense in Japan and gaming approach to risk communication. *International Journal of Mass Emergencies and Disasters*, 25, 101-131, 2007.
- 10) 北原系子：地震の社会史—安政大地震と民衆— 講談社学術文庫, 2000.
- 11) 大澤真幸：虚構の時代の果て ちくま新書, 1996.
- 12) 越澤明：復興計画 中公新書, 2005.
- 13) 神戸新聞社：動脈の転機／高架撤去に現実論の壁（連載／50年目の決算：震災で問われたもの） 神戸新聞 1995年8月15日付, 2005. [http://www.kobe-np.co.jp/sinsai/95kessan/950815kessan5.html]
- 14) 渥美公秀：災害ボランティアの動向—阪神・淡路大震災から中越地震を経て— 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 33, 97-112, 2007..
- 15) 渥美公秀：塩谷から刈羽へ—手紙 復興デザイン研究, 6, 10-11, 2008. [http://snow.nagaokaut.ac.jp/fukkou_design/RDR_News06.pdf]
- 16) 宮本匠：「軸ずらし」と「物語復興」 浦野正樹・大矢根淳・吉川忠寛（編）「復興コミュニティ論入門」（シリーズ災害と社会2） 弘文堂 p.26, 2007.
- 17) 室崎益輝：室崎益輝先生に「復興」について聞く 復興デザイン研究会ニューズレター（特別編集 2007年1月17日号）, 2007. [http://snow-rescue.net/fdk/RDR_News02SI.pdf]
- 18) 矢守克也：災害文化 岡村一成（編）応用心理学事典 丸善 pp.594-595, 2007.
- 19) 矢守克也：〈生活防災〉のすすめ—防災心理学研究ノート ナカニシヤ出版, 2005.
- 20) 中井久夫：昨日のごとく—災厄の年の記録 みすず書房, 1996.
- 21) 北原系子：日本災害史 吉川弘文館, 2006.
- 22) 兵庫県復興10年委員会：阪神・淡路大震災：復興10年総括検証・提言報告《各種調査資料》 兵庫県, 2005.
- 23) 渡辺正幸：開発途上国のための防災計画試論 京都大学防災研究所年報, 46(B), 1-14, 2003.
- 24) 中須正：社会格差と自然災害による人的被害—インド洋大津波によるタイにおける被害を中心に— 防災科学技術研究所研究報告, 69, 7-16, 2006.
- 25) 饗庭伸・市古太郎・吉川仁・中林一樹・村上大和・高見沢邦郎：震災復興まちづくり模擬訓練手法の開発, 日本建築学会技術報告集, 20, 377-382, 2004.
- 26) 吉川忠寛：「事前復興」の到達点と災害教訓から見た課題 浦野正樹・大矢根淳・吉川忠寛（編）復興コミュニティ論入門（シリーズ災害と社会2） 弘文堂 pp.66-75, 2007.
- 27) 矢守克也・渥美公秀・鈴木勇・近藤誠司・淳于思岸：中国・四川大地震に対する社会的反応（第1報） 日本自然災害学会第27回学術講演会講演概要集, 187-188, 2008.
- 28) 渥美公秀・矢守克也・鈴木勇・近藤誠司・淳于思岸：中国・四川大地震に対する社会的反応（第2報） 日本災害復興学会2008年度学会大会予稿集, 21-26, 2008.
- 29) 渥美公秀・矢守克也・鈴木勇・近藤誠司：被災地の観光化—中国・四川大地震に学ぶ災害復興— 災害復興学会2009年度学会大会予稿集, p.15-16, 2009.
- 30) 矢守克也・渥美公秀・鈴木勇・近藤誠司：「圧縮された近代化」と「圧縮された災害復興」—中国・四川大地震に学ぶ災害復興— 災害復興学会2009年度大会講演予稿集, p.11-14, 2009.
- 31) 矢守克也：防災人間科学 東京大学出版会, 2009.

(原稿受付 2009.MM.DD, 登載決定 2009.MM.DD)